

泪（なみだ）の思い出

★★
一般部門
優秀賞

【茨城県・稲角良子】

もう60年も前のことです。私は高校入試の夏期講習を受けるため、中央線に乗っていました。市ヶ谷駅を出て間もなく、隣の席の青年が「ぐえーっ」という奇声を上げてすべり落ち、全身を突っ張って動かなくなりました。乗客は戸惑って見つめています。

「人が倒れました。助けてください」。私は夢中で何回も叫びました。すると中年の女性が乗客の間をぬつて来てくれました。私は倒れた時の様子を伝えました。青年の脈をとりながら女性は「私は看護婦です。次の四ツ谷駅でお降りの方、駅員と運転手にこのことを伝え、医師の手配をお願いしてください。病人は信濃町駅で降ろします。ご協力をお願いします」。何人かの人が「わかった」と答えました。

しゃべりながら看護婦さんは青年の頭を少し後ろへそらせ、顔を横に向け、ネクタイとベルトをゆるめ、シャツのボタンを外しました。それからハンカチを広げると持っていた週刊誌を広げて青年の頭の下へ

差し込みました。四ツ谷駅に着くと数人の人が駆けて行きました。青年は苦しうに荒い息をして吐き始めました。看護婦さんは週刊誌の角を折って受けながら、青年に声を掛けていました。私も週刊誌の角を折りました。手に付きましたが、汚いとは思いませんでした。（死んじやだめ、死なないで）それしかなかつたです。

信濃町駅に着くと担架を持って数人の駅員が入ってきました。「私が付き添ってまいります」と看護婦さんは言った後、私を見つめて「ありがとう。すぐ知らせてください、この人はきつと元気になりますよ。あなたがいてくれて心強かつた。よくやつてくれましたね」。本当に優しいお顔でした。急に涙がこみあげて、止まらなくなりました。涙の中を、青年を載せた担架は急ぎ足で遠ざかつて行きました。